

---

# ケモ研～こちらケモビト研究会！～

しるく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ケモ研〜こちらケモビト研究会！〜

### 【Nコード】

N7755X

### 【作者名】

しるく

### 【あらすじ】

24世紀年を迎えた世界は激変していた。

それは、獣の能力をもったケモビトの誕生。

西暦2100年代、突如として現れた二人のケモビトという新人種は、自然交配などを繰り返して世界中に広がっていった。

そして今やヒトとケモビトが共存するのは当たり前。

そんな世界で今日ごくごく普通のちよつとヒト嫌いな柴犬のケモビトで主人公？柴澄 大成？はヒトとケモビトが共学する？私立嵩観獣人学園高校？通称ケモガクへと入学する。

そこで語られたヒトとケモビトの溝を埋め融和を目指すという学校方針に感銘を受けに受けまくった大成の幼馴染？ 沢井 奏音？ がいきなり？ ケモビト研究会？ なる物を発足して……………

これはそのケモビト研究会通称？ ケモ研？ を中心に巻き起こるちょっと非日常的で色々目茶苦茶な波乱の日常を描いたお話。

〜予習〜（前書き）

予備知識的な物です。

少しづつ手を加えていくかもしれません。

## 〈予習〉

〈私立高観獣人学園〉

通称ケモガクと呼ばれる獣・人共学の高等学校。

教育方針は？ヒトとケモビトの融和と協調？

〈ケモビトとは〉

2100年代に発見された？獣の力を持つ人間？の事を指して言う言葉。

その後自然交配や人工交配等によって急速に世界に広まっていった。発見直後は獣人等と言われていたが、いつしか誰が読んだがケモビト（ケモノ＋ヒト＝ケモビト）と略されるようになった。

ケモノ譲りの高い身体能力を持つケモビトは社会においてなくてはならないものになった半面ヒトからの風当たりは強いものになってしまっていた。そして誕生から二百年という歳月は、ヒトとケモビトの間に見えない壁を作ってしまった。

そのためこういった人種間での犯罪や事件が後を絶たず、一種の社会現象化している側面もある。

ケモビトは、その体躯に関わらずベースとなった生物で一応カテゴリー分けがされており犬や猫など（大型犬小型犬に関わらず）はカテゴリーS。

少し大きくなってカンガルー等の生物がカテゴリーMそして象などと言った超大型生物をカテゴリーLと分類している。

ケモビトとはいえ、姿形はヒトでありその能力を使う時に耳や爪等の特徴的な部分が現れる。

その状態を？ハーフリンク？と言う。何も使わずにケモビトが能力を使用できるのはここまでが限界であり、より効率よく更に能力を

引き出すためには専用に開発されたデバイス？ビースト？を使用する。

デバイス？ビースト（BEAST）？Beasting Ability Structure programming Transfoam device？）ケモビトの能力展開による形態変化するデバイス？

ケモビトが能力を安定的にかつ効率的に使つたために作られたデバイスで、待機状態ではただの直径五センチほどの小さな球体でしかない。

このデバイスは、持ち主のケモビトのベースとなった生物を装着と同時にくみ取つて、持ち主によって様々な形に変形したり能力の増幅デバイスとして機能する。そのため――

一人それぞれたとえ同系統のケモビトであつても全く同じものは存在しない。武器として形をなす物を？アクティブ型？形を成さず増幅デバイスとして機能する物を？ブーステッド型？と言う。特に呼称が決まっているわけではないが、各々が勝手に名前を付けている。（付けていない人も多い）

本来、かなり武器の色が濃いデバイスであるが、ケモビトがその能力を誤つて暴走する危険性もあることからそれを抑制するデバイスとして普及している。

学生など未成年にはシステムにリミッターがかけられた物が一般的に能力を適切な判断力で使用できるとされる中学の卒業時に渡されており、

高校入学時点であらかたビーストは持ち主のベースとなった生物の能力を把握しそれに準じた形や能力を持ち主に授けている。

またこのデバイスによる事故や事件を未然に防ぐために、デバイスが攻撃対象をケモビト以外と認識すると、自動的に待機状態に戻るヒトの保護機能が組み込まれている。

しかし、物によっては不正に取り外されているものも存在している。

〈闘争本能〉

ケモビトが？ビースト？を使用する際に消費する？気力？の事でい  
わばエネルギー。ケモビトが持つその本能に呼応して？ビースト？  
はその能力を行使し形を変化させたりそのデバイスを間に挟むこと  
で？闘争本能？を具現化して打ちだしたりそれを纏うことで身を守  
る事もできる。

？ビースト？はこの本能を波長として読み取り、それをデータ化し  
情報を固定化して具現化させる。

当然個体差があり、この本能の量が？ビースト？の使用時間に比例  
する。

一般的に、巨大な？ビースト？であればあるほど一回当たりに消費  
する？闘争本能？は大きくなる。

ケモビト研究会

奏音が立ち上げたサークル。

部活動の主な物は、所謂なんでも屋みたいなもので、ヒトケモビト  
関わらず相談に乗りそれを解決するという物。

部活動理念は？ヒトとケモビトの調和！？とかなり「ざっくりして」  
更に、かなり「くくりが大きい」が奏音曰く、「ヒトやケモビトの  
相談にのってそれを解決すればそれだけケモビトの見方や評価も変





く予習ーく（後書き）

ISの二次創作を書かせていただいていますしるくと申します。

今回新たにオリジナル小説を書こうと思ひまして、予備知識的な物を書かせていただきました。

皆さんどうぞよろしく願ひします！

## くプロローグ

西暦2100年代。

いわゆるケモビトという人種の始まりは、一人のヒトだったらしい。でもそのヒトは、人間と呼ぶにはあまりに異様であった。

手足や身長などは、平均的な人間のそれだったが、異様だったのは頭部に生えた動物の様な耳そして尻尾だった。

その当時でも、萌え要素として定着していたネコミミや尻尾の類。だがそれはあくまでアニメやラノベ、コスプレの世界だった。

しかしその人間には、確かにあったのだ。

頭部に生えたまるで犬の様なピンっと立った耳とふさふさの尻尾が。

その当時の人々は、地球外生命体だの未知との遭遇だのと騒ぎ立てその？ 始まりの種？ を捕え、さまざまな検査や調査を行った。

そして研究者達が発見したのは、その？ 始まりの種？ が持つ高い身体能力とそしてまるで獣その物の様な嗅覚や聴覚を有していたという事だった。

身体調査と共に進められたのが、後に全世界へと急速にこの種が広まる要因を作ったと言われる人工交配だった。

最初は、このすぐれた種を後世に残さねばならないという研究学的見地から、それが次第に民間にも広がって言ったのだ。

ヒトは、より優れたヒトを望む。

他よりも優れたものになりたいという一種の欲が、その？ 種？ を世

界にはらまいていったのだ。

そして？ 始まりの種？ の発見そして世界への急速な広がり……それが始まった2100年から時は過ぎゆき西暦2301年……。発見から二世紀もの長い年月を経た世界でいつしかその種はこう呼ばれるようになっていた。

ヒトでありながらケモノである存在。

## ケモビトと

朝日まぶしく、降り注ぐマンションの一室。

そこで、布団にくるまって眠りこける一人の少年が居た。  
めざましは疾うに鳴り終え、眠りこけるこの部屋の主にたたき落とされている。

もう彼を起こせるものは誰一人として

「このバカたれがあッ!!!」  
「うおうッ!？」

……いた。

一人の少女が乱入し、その少年の布団を引っぺがしたのだ。

「お、おまッ!？」

「何回ベル鳴らしたと思ってるのよッ!!!」

「鍵閉まつてただろ!？」

「だから親切丁寧に大家さんに鍵借りたわよッ さあ、起きなさい。

あんた今日が何の日か分かって寝てたわけ？」

「……よかった、蹴破つてなくて」

「なんですつてーッ」

「うごッ!!!」

少女は、器用に片手でくるくると掛け布団を丸めて未だ目のさめきらない少年に投げつける。

フンつと鼻を鳴らして腰に手を当てる少女。彼女はこの布団を投げられて、起きたそばから彼を若干のノックアウト状態に陥れた幼馴染

染 沢井 さわい 奏音 かなね。

ちなみに先ほど少年が、蹴破らなくてと安堵したのは彼女がカンガルーをベースに持つケモビトだからだ。

カンガルーの脚力は大型種になれば80kg以上ある身体を、跳躍

によって時速70kmという速度にまで持って行く。  
ヒトが食らえば真面目に内臓破裂である。  
そんな脚力を奏音は、受け継いでいるのだ。  
実際奏音はこの少年の玄関の扉を幾度となく蹴り抜いている。

そして布団を投げられたこの少年は、  
柴澄しばすみ 大成たいせい。  
この世界では、あまり珍しくはない犬をベースに持つケモビトで、  
細かく分けると名字の通り柴犬である。

好きな物は甘いもの全般。  
能力はごくごく普通に、嗅覚聴覚が優れている程度の一般的な犬の  
ケモビトだ。

「だ、大体お前不法侵入だろ！」  
「何が不法侵入よッ！ 起こしに来てあげてるんだからありがたく  
思いなさいッ！」

そう奏音は大成にとって目覚まし代わりに様な存在でもある。  
大成は、色々訳あって今、一人暮らしをしている。  
そのため、寝坊しないように一応めざましはセットするのだが、結  
果は先ほどの通り……。  
だがなんにせよ、起こしに来てくれるのはありがたい。  
……まあ少々手荒いのは、なんとかならないものかと思うが。

「とにかくッ！！ ほらとっとと着替えなさい！ あんた今日入学

式でしょう!!」

「お前は俺の親かッ!?　ってか今日入学式なのお前も一緒だろ」

「いいから着替える~~~~ッ」

「分かった分かったから、とりあえず部屋から出てけッ」

大成は奏音を、無理やり部屋から追い出して鍵を閉める。

ひとまず嵐が去り、安堵しながら滅茶苦茶になった布団を直しつつ大成は着替え始める。

奏音が言ったように、彼は今日高校の入学式を迎える。

クローゼットを開けると、そこには色々私服に混ざって真新しい紺を基調とした制服が顔をのぞかせていた。

大成は、制服を取りだすとそれを椅子に一旦掛けて寝巻を無造作に脱ぐ。

そしてパリッとアイロンのかけられたカッターシャツに袖を通し、エンジ色のネクタイを締めその上から紺色にエンジ色の縁どりのされた裾丈の少し長いブレザーを着る。

最後にストラックスを履きベルトを締めて着替えは終了だ。

ちなみに女子制服は、基本的な色合いは変わらずストラックスがスカートになる程度の変化で奏音がその格好であった。

「終わった?」

「ああ、今行く」

大成はタイミング良く掛けられた声に、短く返して鍵を開けて部屋を飛び出す。

もちろん鞆は忘れていない。

大成はリビングに掛けられたいた時計をちらりと見やる。

「うわ、本当にヤバイな……」

「だから言ったでしようが……全く」

「とりあえず急ごうぜ」

「誰のせいよ」

大成は奏音を急かしてバターロール二つをこれまた器用にくわえて、下駄箱の上にあつた封筒をバツと取って家を後にする。

それは入学案内の封筒で、そこには大成が入学する学校の名前が記されていた。

私立嵩観獣人学園。かさみじゅうじん

ヒトとケモビト共学という意味の獣・人だが一般的に獣と学をもじって？ケモガク？と呼ばれている。

大成の家から一番近い高校にして、この地区唯一の学術機関だ。

大成はそこに今日入学する。

？共学？という言葉に少し不安と若干の戸惑いを覚えながら……

柴澄 大成の波乱の日常が幕を開けた。





## ↳プロローグ↳（後書き）

さてプロローグを終えて。

中々オリジナル小説というのは難しいですね。

二次創作だとヒントを原作から得られるのですがね（汗W

それでは、次回から第一話です。

よろしく願います。

## 第一話――学長と生徒と入学式――

？次のニュースです。先日ケモビトの保護団体『saves』の支部に武装集団が押し入り関係者数名を射殺した事件で、警察庁はこの犯行のメンバーが反ケモビト組織……？

かさみしゅじん  
嵩観獣人学園。

通称？ケモガク？。

その一室に備え付けられた大きなテレビが、最新情報を伝える。情報とは常に新しい物の方が良いに決まっている。

だがテレビの前にいた人物にとって少なくとも今は知りたくない情報の一つだった事だろう。

「悪いが、テレビを消してくれないか」

「ご自分でお付けになられたのに？」

「……いいから…それにいま私は消せる状態にはないよ」

「はいはい、そうでしたね」

男性は不機嫌そうに部屋の隅に立っていた女性に言う。

女性は、綺麗なブロンドの髪を流して上下ピシッとした黒のビジネススーツに身を包んでいた。

茶化しながらも女性は、テレビを消すと男性に式典用の装飾が施された上着を持っていく。

男性は女性からその上着を受け取ると、不機嫌そうに「ごちた。

「全く……せつかくの入学式だというのに。なんと不釣り合いで面白くも無いニュースだ。そうは思わないかい？」

「何と答えれば？」

「そこは世辞でも、頷くべきだろうに…」

「すいません、私は？ヒト？なもので」

「まあ、良いがね？」

女性の目が男性のとある部分を見やる。

その視線の先にはスツと綺麗な三角形の獣耳が左側だけ立っている姿があった。

よく見てみるとこの男性かなり特異な姿をしていた。

髪は色素の抜けたような白色のセミロングヘアで、目の色も右目が青色なのにもかかわらず左目が黄金色のオツドアイ。

更には先ほど女性が見た、左側だけの獣耳。ケモみみ

このような獣耳を持つ？ケモビト？は普通ならば両耳がしっかりと発現するはずであるからこの姿は？ヒト？としてもそして？ケモビト？としても違和感を覚えるものだった。

だが男性はそんな事など気に止める様子も無く、上着を来て身なりを整える。

そして部屋のドアノブに手をかけたところで女性が待ったの声をかけた。

「入学式でのスピーチ原稿はお持ちになりましたか？」

「原稿か……いつも言っているだろう？ 私は話したい事を話す。

前もって書かれた文章に意味などないさ」

「それと、まだ入学式の間までかなりありますがどちらへ？」

「なに……散歩しがてらならこのぐらいあつという間だろう」

男性は柔和な笑みを浮かべ言い返し、その返答を聞かぬ間に部屋を後にする。

その場に残ったのは女性のため息だけだった。

……はあ、時間があるのなら溜まった書類に目でも通してくれればいいのに。

女性は机に積み上げられた書類の一枚をめくって見る。  
珍しくこの書類には目を通していたらしい。

女性はその書類に書かれたサインに目を落として更に深いため息を吐いた。

? principal 学園長  
Waltz・Deomarkiss? ウォルトツ ディオマーキス

?アレで学園長なのだから、始末に悪い?女性のため息はそんな意味を含んだものだった。

「はあはあッ……」

「……あんだ本当に犬のケモビト?」

「アホかッ! 瞬発力でカンガルーに勝てる柴犬が何処にいるんだよ!」

ちなみに柴犬の足の速さのは、計算上だが時速三三キロという記録がある。

最もこれは五〇メートル走のタイムから割り出したもので正確ではないがどっちにしるカンガルーの最高速度七〇キロには遠く及ばな

い。

流石に奏音はそこまでの速度は出ないにしろ足は速い。

そんな奏音に引つ張られて家から学園まで走ったのだから、大成は入学式前にもうへとへとだった。

大成は奏音を睨みつつ、走って乱れた服装を正し息を整える。

そして改めて自分が入学する事になった？私立嵩観獣<sup>かさみじゆうじん</sup>学園？に目をやった。

どうやら、入学式には間にあつたようでまだ登校する生徒が多い。

ケモビトはその能力を最大限使う時に耳や者によつては爪、牙などと言つた特徴的な部位が現れる。

そのため、ケモビトも能力を使わないときは一見するとヒトと同じ容姿になる。

だが今日の前にいる制服を着込んだ生徒達の中に確実に自分たちと同じケモビトがいるのだ。

しかし、不思議な事にそれほど嫌な感じはしない。

ヒトとケモビトがいがみ合っているような、そんなネガティブなイメージを大成はその風景から読みとることはできなかつた。

少なくとも、大成の見立てであるが。

校舎は、近代的な造りで正面に六階建ての本校舎とその右に一棟左に四棟。計五棟、三階建ての校舎が並ぶ。

そして一番左奥に、これから入学式を行うであろう講堂が見える。要するに体育館だ。更にその反対側を向くと体育館よりもさらに巨大なアリーナがあった。

何をするのかは大体想像が付くのだが大成はその想像をあえてせず、考えを紛らわす意味合いも込めて奏音に尋ねた。

「で、これから何処行くんだっけ？」

「ん〜と……確か入学式までは別に行くところは決められてないよ」

「ふ〜ん……そうなのか」

実際このカンガルー娘の所為で（おかげで）ギリギリだった時間に思いのほか余裕が生まれていた。

何か手続きとかそう言うのがあると思っていた大成にとっては、この時間的余裕は息を整えること以外に使い道がなかった。

そしてどうやらその考えは、幼馴染には筒抜けだったようだ。

「全く……やる事がないって顔してるわね」

「どんな顔か教えてほしいもんだね」

「今のあるたの顔を鏡に映してあげましょうか？」

「……イケメンが写るぞ多分」

「馬鹿、酷く間抜けた柴犬の間違いでしょ」

我が幼馴染ながら辛辣なとも思ったがあえて言い返しはしない。

それは、返ってくる言葉が更に辛辣だと真面目に落ち込みそうだったのと、奏音に言ったその前の？イケメン〜？の行が今思くたいと超が付くほどにくだらなかつたからだ。

「ま、まあその話は置いてだな。そこまで言うからにはお前には何かあるのか？」

「当たり前じゃん」

「ちなみに、何だ？」

「んふふ〜そんなの決まってるでしょ！」

そう言うと奏音は大成の手を引き、校舎へと走り出した。

幼馴染とはいえ、女子と手を繋ぐというのは高校生にもなれば、恥ずかしい物だ。

だが、振り払おうにもそれは叶わず。

カンガル―譲りの強烈な瞬発力は、いとも簡単に大成の身体を引っ張っていく。

繰り返すが柴犬はカンガル―に勝てないのだ。

「お、おい!？」

「さあ、行くよ行くよ」

「一応聞いてやるが何処へ行くつもりなんだ？」

「ん〜、まあ行きつく所かな？ それにまだ入ったことも無い所だよ、何処行くかなんてその場所に行ってみないと分かんないじゃん？」

「要はお前、ただ単に見て回りたいだけだなッ!？」

「そうとも言うね」

「そうとしか言わねえんだよおおおッ」

大成の悲鳴にも似た叫び声は、登校する生徒たちの喧騒にかき消されていった。



「到着ッ！！」

「何処にッ！？」

目的地も無いのだからその言葉の使い方は間違っていると思う。

大成はようやく止まった奏音に解放されて息を前より更に乱しながら自分たちが何処に来たのかを確認した。

そこは、校舎と校舎の間に設けられた中庭のような場所で中心にはこじんまりとした噴水があった。

と、ふと大成の目がとまる。

奏音も追ったその視線の先にあったのは、式典用の服に身を包んだ妙な格好の男性が中庭の花壇に水を挙げている光景だった。

アレがまだ作業着を着た用務員なら大成も気に留めなかったが余りにこの場に不釣り合いかつ身形と行動が一致していない。

「この学校じゃ、用務員さんもあんなにめかし込むんだね？」

「だったらせめて、作業着をベースに装飾するだろ」

「でも水あげてるじゃない？」

「……まあ、そりゃ……」

「それに、耳も片っぽしかないし……」

奏音の指摘は、最もで言い返せない。

用務員でなければなんだあの人は？

しかもなんで、耳が片つぽしか……??

一瞬生徒会長か何かポストに付いている生徒かなとも思ったが高校生というにも余りに年が違いすぎる。

予想だが多分自分らよりも十以上は違うはず…。

少しの間その人を観察してしまつたためか、向こうもこちらに気がついたのでじょうろ片手に柔らかな笑みを浮かべてこちらに歩み寄ってきた。

「やあ、私に何か用かな？」

「あ、いえ……」

「ええ、その…」

別に陰口や、根も葉もない様な事を言っていたわけではないので「何でもないです」とその場を立ち去ればよかったのだが、遠巻きになんだかんだと言っていたのは事実でありたとえそれがこの男性に聞こえていなくとも良心が痛んだ。

そして更に、その男性から直接声をかけられるとは思っても居なかった二人は正直結構動揺していた。

その男性は、しばらく顎に手をやりキョトンとした顔でしどろもどろな二人を見ていたが、瞳が何かを見つければ微笑みかけた。

「君たちは新入生だね」

「は、はい」

「同じく……」

「そうか、まあなら私の出で立ちに疑問を持っても仕方がないね」

一人納得する男性を尻目に奏音が大成の小脇を突つつき声を潜める。

「ねえ、どうしてあたし達の学年が分かったんだろう?」

「……いや……それは……分かるかよ、そんな事……」

そう答えた時、男性のピンっと立った耳がピクリと動く。

どうやらこの会話が聞こえてしまったようだ。

反応を見て、大成はビクツとなったが同時に、やっぱりこの人もケモビトなんだと確信した。

「それはね、ネクタイの色だよ。女の子の方はリボンだがね。エンジ色……正確にはマゼンタだね。で、マゼンタが一年、二年になるとシアン。そして三年が紺色というふうだね」

このネクタイの色分けはいわゆる、色のカラーモデル? CMYK? から三つを選んだものらしい。

シアンとマゼンタのネクタイはまあありだが、流石に真っ黄色のネクタイは派手すぎるとの意見が出たため最後の黒が残ったのだが、これも黒だと喪服だと反対意見が出たため紺色にしたそうだ。

マゼンタもシアンも大成にとっては結構派手だと思うのだが。

「なるほど……」

「まあ、全てはパツと見た時に学年がすぐに分かるための配慮だよ。先輩後輩間で変にもめごとにもなりにくいだろうし」

「確かにそうですね」

「それはそうと、さっきからそちらのお嬢さんがチラチラと私の耳に視線をやっているようだが、やはり気になるかね？ コレが」

男性は、左手で自分の耳を弄りながら奏音に問いかけた。

どうやら奏音は、この男性がネクタイの色を説明している時からずっとチラチラ見ていたらしい。

「ばっか、お前！ いやすいません……その…気になさってますよねやっぱりッ」

「ちよ、痛いッて」

「痛いじゃないッ！」

大成は無理やり奏音の頭を、下げさせる。

もちろん自分も頭を下げるが、对象的に男性は柔和な表情を崩さない。

大成にはそれが少し、不気味だったが本当に男性は気分を害した様子はないようだった。

「フフッ、いいさ。別に気にしてもね、仕方のない事だから」

「いえ、でも…」

「ねえ、痛いんだけどッ！！」

「黙ってる、このカンガルー頭ッ！！」

「何だとッ！」

「落ち着きたまえよ、本当に何でもないのでから」

男性は二人をなだめると、再び左手で自分の耳を撫でる。そして落ち着いた事を確認して耳について話してくれた。

「私は、見ての通り？ケモビト？だよ。まあこれは遺伝子病の一つでね。普通の？ケモビト？の様に特徴を隠す事が出来ないんでね。しかもこう言った成りだろう、新人生には毎年のようにこんな反応をされてしまうからね」

「遺伝子病ですか」

「ケモビト？がいくらヒトよりも身体能力や感覚が優れていると言っても結局は生き物であり親から生まれてくる？ケモビト？も居る。

その時稀に、遺伝子病を持って生まれてくる？ケモビト？も居る。ただ遺伝子病と言っても、命にかかわるような事は無く、？ケモビト？に関して言える遺伝子病とは、能力を持つているが使えないと言った様な事例やこの男性の様にベースとなった動物の身体的特徴を隠せない、髪や目の色がおかしいと言ったものが大半である。

「まあ、もう慣れたという感じだろうか……色々考えることもあったが」

「……はあ……」

「……まあそう言う事だよ……。うん？ と、そろそろ時間だね」「え？」

男性は言い終わると、チラッと腕時計に目を落とし呟く。そして男性は、大成たちにも腕時計を見せ言った。

「もうそろそろ、式の時間だ。遅れてはいけないからね」

「うわッ、もうそんな時間ッ！？」

「……まあ元々それほど余裕はあったわけじゃないしな」

「それはまあ……とにかく行こッ！ それじゃ失礼しました」

「あ、おいッ！ あ、あのそれじゃ僕たちはこれでッ」  
「うむ、また会おう」

男性は駆けゆく二人の生徒を見送って、何度目か分からないが微笑んだ。

「今年も、元気のいい生徒たちだね……」

そう呟きながらウォルツ・ディオマーキスは笑うのだった。

体育館に着いた大成たちだったが、中は体育館とは程遠い場所だった。

ステージを半周ぐるりと囲むように並んだ固定式の椅子と四〜五人掛けの机が整然と並んでいる。

簡単に言うなら、武道館の小さいバージョンだろうか。

そしてその一番下にステージには、豪華な演壇やフラワーアートが飾られていた。

外見と中身は違うというが、まさにそれだった。

「広いね」

「ああ……ここまでとは思わなかった」

大成たちは、その場に圧倒されながら入り口で渡された半券に目を

落とす。

この半券は、大成が持ってきた封筒に入っていたもので良く見るとそこには自分のクラスも書かれていた。

(俺は、二組か…)

生徒たちはこの半券によってこの講堂の席を決められそしてクラス分けされるということだ。

よくあるような、「同じクラスだね〜」というやつは無いらしい。

ただ大成にとっては、クラス確認のために人ごみの中を突っ切る必要が無くなったただけ有難かったが。

「ねえ、大成はクラスどこ？」

「願わくばお前と違うクラスが良いんだが」

「そう言わないで、ね、どこ？」

「二組だよ」

「……そうなんだ……」

大成の返事を聞いてしゅんとなる奏音。

一瞬、お、これは違うクラスか？と思ったがその考えはすぐに吹き飛んだ。

「ンフフ〜、あたしも二組〜」

「ああそうですか……」

「しかも、アレだねあたしは、沢井だし大成は柴澄でしょ。クラスの席が前後っぽいよね」

「全ツ然嬉しくねえ……」

「いい加減にしないと蹴っ飛ばすよッ!？」

そんな問答を繰り返しながら大成と奏音は半券に書かれた席に着席する。

そこは丁度、真中あたりでステージがよく見える場所だった。

「へえよく見えるわね」

「別にアイドルのステージ見に来てるわけでもないんだから…」

「馬鹿ね、あんた知らないの？」

「何を？」

「この学園の学長ってかなりの雄弁家で特徴的な演説が人気らしいんだって」

「そんなの何処だって同じじゃないのか？」

いつの時代だって、校長の話は長くつまらない物だ。

良い事を言っているのは理解できるが、それでもどうしても眠くなってくる。

「違うわよ、何でもその話を聞くためだけに学長室に通う生徒もいるとか居ないとか…」

「どっちだよ」

「とにかく、それぐらい有名なんだって」

二人がそうやって話をしている間にも新入生達は続々と講堂に入ってくる。

どうやらこの学園の入学式というのは新入生だけで行う物の様だ。

そしてしばらくして、講堂の照明がゆっくりと落とされ入学式が始まった。



「さて、それでは行くでしょう」

ウォルツは身形を今一度整えて咳払いをすると、ステージの袖から出ていこうとする。

しかしそのウォルツを？あの？女性が呼びとめた。

「ちょっとよろしいでしょうか？」

「……はあ……何だね？ リオーネ」

ウォルツの秘書を務める女性

リオーネ・ハインツ

は表情を変えずゆっくりとウォルツに近寄ると無造作に帽子をかぶせた。

「ん？ なんだこれは？」

「いわゆる角帽と呼ばれる物です。一応式典用に装飾はしてもらいましたが」

「……いや、そう言う事では無くてね？」

「……そのままですと耳が見えて……いつもでしたね」

「おちよくられていると考えていいのかな？」

「間違いではありません」

「そこは、嘘でも否定したまえッ」

ウォルツは式前だといふのにかなりペースを乱された。

リオーネは別に悪いヒトでは無い。

付き合いも長いから、それほどこのやり取りも気分を害するという

わけでは無いのだがどこか独特の間と感覚を持っているのは確かで、  
現に彼女の感性にいまこうしてウォルツがペースを乱されている。  
言ってみれば不思議ちゃんなのだ。

……これで優秀でなかったら、恐らく何処の企業も就職は無理そう  
だな……

ウォルツは心の中で呟き、頭の上に置かれた角帽を外すとリオーネ  
に手渡した。

「よろしいのですか？」

「私は気にしていないからね」

「そうですか」

そう言っリオーネはその角帽を自分の頭の上に置く。  
そして手にしていた書類に目を通し始めた。

「……」

「……何か？」

「いや、自分でかぶるのだね」

「まあ、持っついても邪魔ですから」

「邪魔とは……まあ、自分で用意したのだろう？」

「ええ、学長のために用意しました」

「……」

「……」

「……」

「……」

ウォルツはその無言の圧力と微動だにしない視線に負けたため息交  
じりに角帽を自分の頭の上に載せてステーション袖を後にした。

まあ何はともあれ、これからは自分の時間である。

ウォルツが袖から姿を現すと、まだ少しざわめきつつあった講堂が一瞬で静かになる。

ウォルツは、演壇に置かれたさかさまに置かれたコップをひっくり返しガラスの水差しから水を適量注ぎ入れ口の中を潤す。

そして息を静かに吐き、ゆっくりと口を開いた。

「皆さん、ご入学おめでとつじびいます」

ケモガクの学長にして雄弁家？ウォルツ・ディオマーキス？の？演説？が始まり、いよいよ入学式が幕を開けた。



## 第一話ー学長と生徒と入学式ー（後書き）

ご無沙汰です。

まずは新年明けましておめでとございませう。  
遅すぎですが挨拶はしっかりと。

ようやくケモ研の第一話をお送り出来ました。  
こちらの方もよろしくお願ひします。

それでは第二話でお会いしましょう。

これからどんどんユニーク（自分で言うのもアレですけど）なキャラクター達が登場します。

ISをご覧になられている方は分かると思いますが、オリキャラ造るの大好きです（爆）  
特にこれはオリジナル小説なので、アレですね、オリキャラ造りたい放題です（ry

そんな感じですが、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7755x/>

---

ケモ研～こちらケモビト研究会！～

2012年1月14日01時02分発行